

第2回 わくわく地方生活実現会議 議事要旨

日 時：平成30年2月26日（月）14:00～16:00

場 所：中央合同庁舎4号館第1特別会議室

○大津参事官 それでは、きょうはありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまより第2回「わくわく地方生活実現会議」を開催いたします。

本日は、御多忙の中、御参集いただきましてまことにありがとうございます。

本日のプレゼンテーションは、お願いしております委員ゲストの皆様から事前に御了解をいただき、プレス公開としておりますので御了承ください。

まず、会議の開催に当たり、梶山まち・ひと・しごと創生担当大臣から御挨拶申し上げます。

○梶山大臣 皆さんこんにちは。担当大臣の梶山でございます。本日も全国各地からこの会議に御出席いただきまして、まことにありがとうございます。

第1回目の会議が前回行われたわけでありましてけれども、私は所要で途中退席いたしました。大変申しわけございませんでした。

その後の委員会のやりとりにつきましては、事務局から詳細に伺っております。大変活発な議論ができたということで、喜んでいるところであります。

この会議では広く各界から委員に就任していただいておりますので、委員の皆様からプレゼンテーションをしていただきたいと思いますと考えております。

本日は、地方生活の魅力、UIJターンの拡大等をテーマに、池田委員、指出委員、佐藤委員、俵委員、中原委員からお願いをいたします。

また、本日は中原委員からの御紹介により、地域で御活躍されている中村様、山口様、西田様にゲストスピーカーとしてプレゼンテーションしていただきたいと思います。御出席の皆様には、前回同様に忌憚のない御意見を展開していただくことを期待いたしまして、私からの挨拶にかえさせていただきます。

ありがとうございます。

○大津参事官 ありがとうございます。

また、本日は田中副大臣、長坂政務官にも出席いただいております。

田中副大臣、お願いいたします。

○田中副大臣 きょうは初めて「わくわく地方生活実現会議」に出席させていただきます。きょうはプレゼンを大変楽しみに出席させていただきました。どうかよろしく願いいたします。

○大津参事官 ありがとうございます。

長坂政務官、お願いいたします。

○長坂政務官 引き続き、どうぞよろしくをお願いいたします。

○大津参事官 ありがとうございます。

今後の議事運営につきましては座長をお願いいたしたいと思っております。よろしくお願いたします。

○樋口座長 それでは、議事に入ります。

まず、地方生活の魅力、UIJターンの拡大等につきまして、事前をお願いしております委員にプレゼンテーションをお願いしたいと思っております。

恐縮ですが、時間の関係でお一方10分程度でお願いできますでしょうか。

最初に、池田弘委員からお願いします。

○池田委員 ただいま御紹介いただきました、日本ニュービジネス協議会連合会の池田でございます。前回は出席できなくて申しわけございませんでした。

ニュービジネス協議会は、全国都道府県単位に支部がございまして、全国を網羅しております。

(PP)

私どもは地方に根差した中堅企業、俗に言う旦那衆が中心に、そこにベンチャーなりイノベーションを希望される若い人たちが参加している全国組織でございます。

そういった方々のベンチャー育成をする、御自身の会社がイノベーションするという活動を通して、私どもが感じた問題点を政策提言として、JNB全国組織でまとめて、政府の方に提言させていただいている内容を中心にお話しをさせていただきます。

地方創生を実践していると、私どもの会員企業は特に地方に根差しておりますので、人材という視点で大変問題を感じております。

地方に根を張って、新会社、新事業を起こし、あるいは既存企業にあってイノベーションを起こすような人材の不足、これは圧倒的でございます。

御存じのとおり、若者も東京中心に首都圏に出ている。それも地方創生は私も委員をさせていただいて提言する中で、官僚や有識者のアドバイザーとして地方に関して実際にやるという仕組みは物すごくでき上がってまいりました。ただ、最終的に私どもが地方でやっていると、自分でみずから事業リスクも背負いながら、地方に根を生やしてチャレンジする人材が圧倒的に少ない、いないということです。

そういう人たちがどうやったらできるのかということをいろいろ検討し、実践してまいりました。その中で、やはり地方の銀行や中堅企業の旦那衆が主体となって、そこに行政や大学などがサポートする形でなければうまくいかない。よく勘違いするのが、地方自治体が絵を描けば、あたかも成功するような絵になるわけですが、実践するのはだれか。これは民間しかないということを、ぜひ深く御理解いただきたいと思います。

それもベンチャーを起こす、新しい事業を起こす、また、イノベーション、最近の後継

者不足とかいろいろなことを考えると、地方で中堅企業の旦那衆がサポートをする形でそういった思いのある人材を抱え、支援をする。金銭面も、いわゆる財務面、信用、ネットワークといった構造が必要であろうかと。

その地域で信用力と経営経験からメンターとしてサポートし続ける。これらが相まって、やっと成功事例に結びつく。そんなに成功確率は高くないわけです。

(PP)

2 ページに行きますと、参考 1 として、内閣府が 5 年前にやりましたアンケートでは、何と 20 代～40 代においては 50% の人が地方に帰って、地方貢献をしてもいい、人生もかけてもいいと。

全世代でも 4 割の方が地方移住に前向きなアンケートを出していただいています。

(PP)

3 ページに行ってください。地方創生に向けて、私どもが具体的に提言させていただいている中で、そういった大都市圏の若年からミドル層の人材の、地方イノベーション推進人材としての活用支援をする。それが先ほど言った行政であったり、東京の人材紹介会社さんが窓口をつくって紹介する。地方の企業をもう少しよく知ってもらおうというような具体的な施策を大変やっていただきました。なかなか戻らない理由は何だろう。

支援がなくても私どものグループは毎年 40 人ぐらいの U ターン、I ターンを受けているのです。そのときに、優秀な人材が必ずネックになるのが、奥さんと相談しました、子供と相談しました。次の資料にございますが、給与格差が 2、3 割あるのです。

そうすると、将来の教育の問題とか生活の問題を考えると単身で行くか、もしくは離婚してから行ってくださいということで、断念するのが圧倒的でございます。これは日本が地方と首都圏の賃金格差が非常に大きくなっているということでございます。

そういうことをやるのにあわせて、地方でベンチャー投資促進税制を提言する流れをつくっていただき、ベンチャーファンドの税制優遇の制度もつくっていただきました。

それを今度、後に説明しますが再生ファンドです。ベンチャーだけではなくて、今は後継者不足、もしくは再生する案件が山ほど来ています。私のところでも相当の数が来ています。そこには人材がない。また、リスクマネーが余りにも少な過ぎる。地方の銀行と組んで再生ファンド、ベンチャーファンドで税制優遇を、再生ファンドにも拡大していただきたい。

官民ファンドのリスクマネー供給機能の地方創生への最大活用で、官民ファンドというのは、いわゆる国立大学、4 大学に圧倒的に 1,000 億の資金のファンドをつくられましたので、それを地方大学、それも国立大学だけではなくて、地方の私立大学にもそのファンドを広げていただくような仕組みをつくっていただきたいというのが 4 番目です。

三大都市圏への学生流入の抑制。これは一つの方向が出ました。

(PP)

4 ページを見ていただきます。大都市圏の若年からミドル層の人材の、地方イノベーシ

ジョン推進人材としての活用ということが、そこで文章になっています。

具体的施策として、5行目になります。「そのために、国が3年の間、大都市圏との賃金格差を埋める所得を給付する制度」をぜひつくっていただきたいということをお願いしたい。

家族が反対しますので、家族が移転する場合にはそれ相応の支度金を給付する。ましてや高齢者がいらっしやると、もう圧倒的に来ない。気持ちはあっても来ないというのが現状でございます。

地方の活性化に希望を持つ若年からミドル層の人材を国が広く公募し、3年間給与を差額補填する形で地方の企業への移転を促す。3年後、受け入れ企業と公募者が改めて面談を行い、3年間働いて合意に至らなかったら、また紹介するという仕組みをきちんとつくっていただくことによって、セーフティーガードをつくっていただく。

例えば、雇用保険が今、6兆円ほどの資金がございます。その一部を活用するというのも、一つの案としてあるのではなかろうかということをお願いしたい。

(PP)

5ページに行きますと、参考として中堅企業、これは地方が中心でございます。

ほかの資本金に比べますと、1億～10億ほどの資本金の企業が圧倒的に売り上げを伸ばしております。25.4%です。大企業ではないのです。小企業でもないのです。1,000万～1億。しかし、2.1%伸ばしています。

設備投資も、その資本金のところが一番多くございます。

(PP)

6ページです。先ほどの地方との所得格差をごらんいただきます。23区にした場合に、新潟の政令市でも賃金格差が63%。要するに、37%のダウンでございます。それだけファミリーで生活しているのが、地方に帰ったから、地方に行ったら安いでしょうと。これは論外です。教育は全国同じでございます。大学、もしくは海外に教育に出すときには、同じ資金がかかります。

そういう意味で、その格差が今、広がって、圧倒的になっておりますのでよろしくお願いします。

(PP)

2番目は「企業のベンチャー投資促進税制」の活用。これはベンチャーファンドが、企業が投資しますと50%税制になったわけです。

(PP)

8ページに行きますと、これは私どものグループ、NSGグループと申しますが、3年かけました老舗ホテル、また、酒蔵、味噌蔵の経営を継承しています。そこには、圧倒的に資金、後継者が必要になる。

実際、ここに跡継ぎになって社長に任命したのは、みんな30代です。物すごく業績を上げて黒字にできています。やはり新しい感覚で新しいイノベーションができるのです。

そこにはやはり資金が必要だと。そういう意味で、ベンチャーファンドだけではなくて再生ファンドへの拡大をお願いしたい。

(PP)

4番目は、先ほど官民ファンドにつきまして「官民イノベーションプログラム」。いわゆる東京大学、東北大学、京都大学、大阪大学、日本の国立大学を対象としている官民ファンドでございます。これを地方の大学に。

今は国立大学も対象になることを検討しているということで、私立大学も対象になるように、ぜひお願いしたいと思います。

(PP)

10ページです。三大都市圏への学生流入の抑制。これはもう決まりましたので、終わります。

(PP)

そういう意味で、地方の大学の地元就職率は約5割なのですが、専修学校は7割を超えていますので、地方への推進抑制をお願いしたいと思います。

以上、私のほうからプレゼンさせていただきました。御清聴ありがとうございました。

○樋口座長 どうもありがとうございました。

続きまして、指出一正委員からお願いします。

○指出委員 『ソトコト』という雑誌の編集長の指出です。楽しみに伺わせてもらいました。

きょうは若い人で地域にかかわりたい人たちの気持ちを代弁しようと思っています。私は48歳なので、もう若くないのですが、週の2日東京にいて、残りの5日間は、圧倒的な中山間地域で頑張っている若い人であったり、地方都市でまちづくりをやっている若い人に会いに行っています。

トークイベントを週に4回以上やっているのです。あほなくらいしゃべっているのですが、きょうは10分なので手短に行きたいと思います。

(PP)

「ぼくらは地方で幸せを見つける」という題で持ってきました。私はバブルど真ん中のときに東京の大学にいたのですが、大学にいながら、ほとんど東北や中国地方、四国地方に釣りばかり行っていました。頭の中の7割ぐらいが、まだこのイワナのことしか考えていないです。残りの3割で仕事をしています。

(PP)

最近、この魚を脅かす存在が出てきました。タナゴです。タナゴとイワナがいる場所は圧倒的に豊かな暮らしが待っているというのが、私の勝手な持論です。しかし、地政学的には合っているのです。新潟しかり、秋田しかり。つまり、上流から下流までサステイナビリティが担保されている場所、自然資本がたくさんある場所にこの魚たちはいるのです。しかも小さいものだから、みんな見落としがちなのです。

これは何を意味するかというと、マクロな視点ばかり学んだ結果、若い人たちはどんどん地方を離れていってしまった。実はガリガリ君と同じぐらいの大ききで社会を見ると、解像度が上がるのです。この魚だって横から見たら美しいけれども、上から見たらただの雑魚です。

しかし、横から見ることで輝き、光を放つ。これは地域のことを見るときにとっても大事な視点です。

(PP)

こういう本を、いろいろつくっています。

(PP)

高知県の文化広報の編集委員もやっています。これは徹底的に高知県に提案して、若い人たちを集めてもらってやったのですが、まず、1から10まで坂本龍馬やカツオのたたきには頼らないようにしようと思いました。1から10まで昔の人がつくったアイコンみたいなものは一回横に置いて、今の地元の人たちが何をおもしろがっているか。内向きの視点で編集しようと言って続けています。今は6年たっています。

20人ぐらいの若い地元の編集委員が、私もやりたい、僕もやりたいと言ってくれました。

(PP)

これを見て長野市さんから依頼を受けて、ことしから『ナガラボ』という、長野市の若者向けのウェブメディアの編集長もやっています。

おととい長野市に行ってきて、80人ぐらいの若い人たちと一緒に、みんながメディアになれば新しい仲間ができる。それが今のインナープロモーションではとても大事なことから、みんなは地域を編集できる、地域の編集者になりましょうという話をしてきました。これはずっと伴走しています。

善光寺などはやりません。その横道だけやったり、本と長野がつくるという小さい場所を特集します。そうすると、若い人たちはそこがおもしろいことをよく知っているから、うなずいてくれるのです。天の岩戸作戦と呼んでいます。中がおもしろいとなれば、外からみんなのぞきにやってくるのです。中がつまらなかつたら誰も来ません。ないものねだりの地方創生はやめましょう。

(PP)

おとし、こういう本を出したのですけれども、ここから「関係人口」という言葉がどんどん広がっていってくれました。私は観光協会などはもうやめてしまえとどこでも言っています。地方によくある観光案内所のような場所を今、つくってももったいないから、もっと違うお金に使ったほうが良いと言っているのですが、それもこの後に、その結果が出ている事例をお見せします。

(PP)

関係人口を簡単に手短にお話しすると、まったく空白の地帯に言葉ができたのです。一言でいえば観光以上、移住未満の人たちです。若者と定義してもいいのですが、実はふる

さを捨てて東京で役職についてしまって、家も持って家族ができてしまって、後ろめたい気持ちのおじさんたちからも大絶賛を受けています。

関係人口だったら戻れる。そうですね。ですから、関係人口というのはあらゆる世代に対応できる言葉です。

(PP)

関係人口の特集を続けています。結果的に、私も熱海の関係人口です。そういうふうに関心がある人が言ってくれて、これはすごくいい言葉だと私は思うのですが、言葉というのは大体、言われる側がむかついたり、言っている側が気分よくなったり、差があるのです。しかし、この関係人口には差がないのです。言う側も理解しやすい。言われる側もまったくそのとおりと腑に落ちやすいのです。ですから、この言葉を育てましょう。これは移住、定住のためのとても大事な、パイパスではないですが、真ん中ですね。階段です。

(PP)

関係人口の先生役を島根県、奈良県、福井県、いろいろな県の行政の方と組んで、私が総合監修をやっていますけれども、具体的には、この人材育成講座で、島根の場合は80人が卒業してくれて、移住しなくてもいいと言っているのに20名以上が移住してくれました。

(PP)

ただの移住ではありません。起業してくれています。お年寄りのための音楽療法の社団法人をつくってくれた女の子。それから、耕作放棄地を金魚の養殖池に変えてくれた男子。農業もやっています。それから、地元の大学生とちょっと上の大人たちが会えるシェアスペースを、築80年の民家を改装してつくってくれた建築系の女の子。こうやって社会にかかわる気持ちの関係人口から生まれていくのです。

1年後には移住しないけれども、3年、4年たつとみんな移住に興味を持ってくれるのです。なぜかというと、都市との関係性が広がるからです。都市との関係性ができないうちから移住施策を持っていても、1年ではなかなか結果が出ないですね。だからこそ関係人口というグラデーションを大事にするのがいいと思います。

(PP)

私は関係人口の話をしに来たわけではないので、ちょっとどんどん行きます。

この辺はみんな関係人口の私の生徒さんたちですね。かわいい生徒さんたちです。

(PP)

このような感じで、15人くらいの講座を6個ぐらいやっています。きのうもこの女の子たち、名城大学の学生さんたちが、新城市の温泉でスナックを開いてくれました。地元の方が大喜びされていました。

(PP)

これはもう一つの持論ですけれども、移住したい若者を育てる、移住したい若者をふやすためには、一つの視点が抜けています。何かというと、移住してくる人たちを迎え入れる魅力的な若者たちを地域に生み出さなければいけないですね。これは福井県大野市のみ

ずコトアカデミーという、依頼を受けてやっている人材育成講座ですけれども、この若者たちは片仮名で「ミズカラ」というユニットをつくって、大野市出身、大野市で働いている若者たちです。建築家だったり、介護士であったり、コーヒー屋さんのオーナーだったりです。

彼らが地元を愛する気持ちで、みずから行動を起こすということで「ミズカラ」です。それから、上水率がたったの2割という奇跡の湧水の町なのです。ですから、水のことが大好き。ですから「ミズカラ」考えようことでユニットを組みました。

彼ら、彼女たちと私が一緒に、東京や大都市の若者たちが地域にかかわる先生役をやっています。

(PP)

魅力的な仲間がいれば、地域にはみんな足を運ぶのです。

(PP)

こうやって地元の産品で一夜限りの、水を食べるレストランというのを企画してくれました。おしゃれですね。

(PP)

もう東京と地方の格差はないのです。むしろクリエイティビティでいったら、自然資本が圧倒的に勝っている地域のほうが格好いいことはできるのです。これも、もう本当に白山のふもとですね。打波川でやって、ヤマセミが飛び交うようなすごく美しい場所ですけども、こういう一夜限りのレストランを彼らがイベントとして開いて、都会の人をもてなしてくれるのです。

(PP)

これは関係人口を生み出しやすいわけです。しかも山の中の町ですから、ブリもマグロもヒラメも出てきません。メインディッシュはドジョウです。アジメドジョウのフリット。そういうのがおしゃれでおいしいわけです。

(PP)

こういったものを、私は地域を編集する視点と名づけています。健康長寿だからこんにゃくとか言っている場合ではないですね。こんにゃくと慶応ボーイを掛け合わせたら教育が生まれたりする。そういうことをやる。そういう地域の編集者を育てることが、地方を盛り上げる大事な視点です。

(PP)

これは広島県さんとことしいっぱいやっていて、さとやま未来博という、50万人ぐらいが広島の中山間地域に来てくれるとうれしいという、エキシビションの総合監修を務めさせてもらいました。隈研吾さんをお願いして、廃校を3校リノベーションしてもらったのです。

(PP)

そのときにクラウドファンディングで3,800万円のお金が集まりました。集まるのです。

なぜかという、みんな物なんか欲しくないのです。経験や体験なんて年配の方だけがお金を払っているだけ。みんな若者が何にお金をつかっているかといったら、関わりにお金を払っているのです。中山間地域や地方都市のみんなと関係をつくりたいのです。そこにしかない、東京にいないタイプのおじさんやおばさんと出会いたいのです。そのためにお金を払っている。

(PP)

もう一個だけ話ができるかもしれませんね。あと1分ですか。これで終わりにします。

これは宮崎県です。宮崎移住、定住の施策もすばらしいのですけれども、何より地元の若者たちが起業し始めているのです。

(PP)

その筆頭が、この児湯郡新富町という場所です。宮崎市内から1時間ぐらいの場所なのですけれども、ここは圧倒的なことを去年成し遂げてしまったのです。何かというと、観光協会をなくしてしまったのです。観光協会の予算で何をやっているかということ、地元の若者や、農業をやりたい人たちの育成にお金を回したのです。結果的に何が起きたかというと、今まで足を運んでいなかった宮崎公立大の女子大生たちがインターンでやって来るようになったのです。

若い人たちの背中を押すのは、地元のことを愛するようなタイミングや空気をつくることなのです。そのために予算を町長がこちらに充てた結果、ソーシャル系、いわゆる社会にかかわりたい若者たちを育てる予算になったと。これが私の中では、地方をおもしろくしていく上で、地域に興味を持つ若者や、地域に移住したい人たちの気持ちを醸成するときに、最近は受け入れる側の魅力も大事なのではないかと考えています。なので、Uターン、Iターンだけではなくて、地域で関係人口を迎え入れる人たちを育てていくというのも大事だなと思います。

これでプレゼンは終わりにさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

○樋口座長 どうもありがとうございました。

それでは、続きまして佐藤可奈子委員からお願いします。

○佐藤委員 よろしく申し上げます。佐藤と申します。

今、新潟県に住んでいます。出身は四国の香川です。きょうは移住して8年目農業を続けておりますが、その中で感じたこと、こういうのが必要なのではないかということをお話しさせていただきます。

(PP)

現在、「雪の日舎」という農園をやっております。しかし、単なる農園ではなくて、実は農家を中心にして異業種が集まって運営しています。管理栄養士、保育士、現在勉強中の社会福祉士などで、自社農園でも生産はしておりますが、集落の人の作物を買い取って、商品開発や販売、あとは地方の暮らしを商品と一緒に伝えるという意味で、ウェブメディアのカートつきのネットショップを運営したり、あとは子供のファームウェアを開発した

り、いろいろやっております。

現在、農村をまるごと幼稚園に見立てた拠点づくりというのに取り組んでいるところです。

(PP)

場所はこのような感じですか。山合いの集落です。9軒24人、私が最初に集落に出会ったときは6軒13人でした。

(PP)

冬は4メートル近く雪の積もる豪雪地です。

すごい雪国ですけれども、この雪がもたらす目に見えない価値というのはすごくたくさんありまして、私たちもそういうのを届けたいねというので、「雪の日舎」と名づけました。

移住してからずっと、かなやんファームという名前で単独で農園をやっていたのですが、それが去年から組織化してちゃんとやろうというので、名称も変更しました。

(PP)

何で組織化してやろうとなったのかというと、後で移住女子の話もしますが、農家として現場の山路の農家さんの話の課題を聞いているのと、一方で移住女子として、都市の女の人の話を聞いていると、両方とも同じことを言っているなというのに気づいたのです。

前回もちょっと話しましたが、両方とも育む不安をよく話してくれるのです。作物を育む、子供を育む。これから暮らしをどうつくっていか育む。育むというのは実はとても幸せなことのはずなのに、それがすごくやりづらい、生きづらい。何かもやもやを抱えている。

(PP)

しかし、この2つを合わせたら問題は解決するのではないのかというのが、私たちの考えでした。

そもそも何で農村は衰退していったのだろうかと考えたときに、もともと里山にはその資源を生かした仕事がいっぱいあった。今でも地域の人のお屋敷とか麴屋という屋号があらわすように、その場所に仕事があったけれども、経済成長で農村から都市に人口と仕事に移行して何が起きたのかと考えたら、私たちは暮らしと仕事と子育てが分断してしまったのだなと思いました。

それでは、都市ではそれをどのような解決しようとしているのかというと、暮らしでもない、仕事でもない、サードプレイスをいかに豊かにするかというふうに向かっているのですけれども、実は、地方とか農村でいうとこの全部を暮らし、仕事、子育てを地続きにするワンプレート、全部まるっと一緒にその場所でやってしまうほうが、農村のあり方にすごくフィットしているのではないか、居心地がいいのではないか、あるいは農村だからそれが実現できるのではないかと考えるようになりました。

(PP)

そこで、私たちのアイデアでは農業と保育を掛け合わせた事業をやろうと。農村の土壌に保育の幹を育てる。農業と保育というのはすごく相性がいいのです。農業の師匠が言っていることと、保育のプロが言っていることは、両方とも同じことを言っているということも気づきました。

(PP)

そういうことで、私たちは子供の育ちの瞬間に立ち会える暮らし方、働き方をしたいという方向けに、商品や場、サービスを提供していこうというので取り組んでいるところです。

(PP)

「こどもおやつ」をつくって開発中です。

(PP)

これは先ほど言ったウェブメディアです。

(PP)

その中で、最近すごくおもしろい話が、移住者は保育業界の出身の方がすごくふえてきたなという実感があります。彼女たちは一体何を求めてこの場所に来ているのかという座談会をしたのですが、これを話し出すとすごく長くなるので、実際にウェブを見ていただきたいと思うのです。

そのような農村と子供を育てるという観点は、すごく近づいてきているのだなというのを感じております。

(PP)

その他、ファームウェアを開発しています。

(PP)

この場所で拠点づくりをしようとしております。

(PP)

もともと私自身は政治学科の出身でして、海外で働きたいなと感じていました。しかし、それが現場に行ってしまうと応急処置しかできない。本当は蛇口の水を締めるところをやりたいと感じました。

(PP)

そのような中で出会ったのが、中越地震の復興ボランティアで出会った池谷集落だったのです。

(PP)

当時6軒13人、限界集落ですとチラシにも書かれていたのですが、実際は限界集落ではなかったのです。何でかという、そこの人たちがみんな夢を語っていたのです。指出さんが先ほどおっしゃったように、そこに住んでいる人自身が光を放っていたという感じでしたが、ここは「きぼうしゅうらく」なのだなど。もっとこの人たちのことを知りたい、応援したいとなって、毎月通うようになりました。

そうしていくと、おもしろいことに、一緒に農作業をやっていると、その地域の人というのは農業を通じて、農業が生む生き方とか、哲学とか、行事、文化を教えてくれる。当時リーマンショックがあったのも関係して、何か不安に対して世の中が揺れ動いている中で、すごく自分の生き方に自信があって、信じているものがある、変化に対してしなやかだけれどもぶれない生き方をしている姿が、すごくうらやましいなと思いました。

(PP)

こういう大人になりたいなという思いで、大学を卒業してそのまま移住し、就農した形となりました。

(PP)

農業は8年目ですが、農業研修を2年間挟みまして現在に到ります。

(PP)

ところが、私1人が農村で農業をしても、農村は変わらないなと感じたときから、2013年から移住女子の活動が始まりました。中山間地域に移住した女の子たちを組織化して、都市と農村をつなぐフリーペーパーをつくろうというので、東京の大学とか、移住の窓口などに置くようになりました。年4回発刊しまして、実際にこれを手にとった方がインターンに来てくれたりとか、移住してくれたりという動きはあったのですが、やはりこういう紙媒体というのは情報が一方通行なので、手にとった方がその後どうなったのかというのを追いかけることができなかったのです。

(PP)

2年前ぐらいから、2014年からは全国移住者サミットというので、全国各地に移住した女の子たちを集めて、地方に興味がある都市の子たちに向けていろいろな情報提供や生き方、質問に答えたりというのでもやるようになりました。

(PP)

実際に、こういう場だと一本釣りができるので、すごく確実でした。今は移住女子という言葉が結構一般的になったので、次のフェーズだねということで、これは一旦ストップして、みんなでこれからどうしようかと考えています。

前回の会議でも言ったように、やる気のある子はどんどん移住してくれるので、私たちが背中を押さなくても今、来ているのだなと。それでは、普通の子はどうしたら来てくれるのだろうというのを考えているところです。

(PP)

一方で、やはり地元の人が魅力的でなければいけないけれども、地元で魅力的な若者は意外と目に見えないよねという。しかし、本当はこの若い人たちが目に見えると、その後どんどん磁石みたいになって続いていくのです。それが地域をさかのぼって個人を高めてくれるというのにも気づきました。

(PP)

見える化としては、若い農家さんを組織化して、いろいろな農業掛ける異業種の掛け合

わせでプロジェクトもやったりしました。

(PP)

こうやって都市から農村、地方に向けて途切れのないレールで、それぞれにコミュニティーの受け皿をつくってきたのが今まででした。

(PP)

しかし、そのコミュニティーそれぞれにいつもいるのが移住女子という子たちです。

(PP)

この移住女子はどのような子なのかというと、実は地域起こし協力隊というルートから来た以外の子たちなのです。総務省とか協力隊をむちゃくちゃふやそうとしていますけれども、ちょっと前のめりな人たちです。しかし、その一方で移住女子として来る子たちというのは、もっと自然体な子たちなのです。そういう子たちというのはリーダーというより、職場になれる子、地域に移住していろいろな人たちの力を引き出して役割を与えられる。自然体だから職場になれるのですけれども、何で自然体なのかと考えました。

(PP)

そうやって来る移住女子たちの心の内訳は、一つは課題意識がある方。意識高い系。それによって何か認められたい、何か地方で興したいという子。

(PP)

一方で、普通に暮らしたい子。この子がすごく触媒になってくれることが多いです。

普通に暮らしたいというのはどういうことなのだろうかということ、大学を卒業する、結婚する、子育て、その他、いろいろな変化の中で、自分にとって一番何が大切かというのを考え続けてきている子たちなのです。

だからこそ、すごくフットワークも軽いですし、変化に対してすごく受け入れやすい。しかし、実はその普通に暮らすというのが今、できづらい世の中なのだということもすごく感じました。

時間が足りなくなりました。済みません。

(PP)

地方の魅力。あとはこのとおりなので資料を見ていただいて、一番言いたいところは最後です。IUJターンの拡大について、大事だと思うこと。今までの移住女子の動きや、私の地方での活動を通して感じていること。その子たちを見ていると、知りたいのは地方の魅力でも、地方の企業に何があるかでも、移住支援をどのような行政がしているかでもなくて、生き方、暮らし方のパターンの数を知りたいのです。

今の生き方は、会社に入って、子供を持ってという、当たり前のルート以外にも多様な生き方がたくさんある。そのバリエーションを知りたい。どのような生き方ができるのか。なので、移住のセミナーというか、相談会で行政の人に会いたいのではなくて、移住の先輩に会いたい。そういう意味では、観光地、職場、食も大事だけれども、いかに先輩に会えるか、人に会えるかという接点をどれぐらいつくれるかというのが重要だと感じています。

す。

(PP)

また、先ほどの生き方が多様という意味では、超個別対応係がすごく必要だなと。なかなか型にはめられないのが最近の若い子の生き方に対する考え方ですので、悩みもすごく多様です。だからこそ超個別対応係があれば対応ができるだろうなど。

今、ここに画像を出している、新潟のいなカレッジという、地方でインターンをする制度などは完全に超個別対応してくれるので、定住率が8割になっております。

(PP)

最後に、そうやって10代の若い子のフットワークをいかに後押しできるかというのも重要になります。関係人口を高める上でも、移動のしやすさを後押しするのはすごく重要だと感じております。

十日町だと右上にある交通費のサポート、民泊などを掛け合わせると、ただで行き来できるというのもあります。青春18切符がいつでも使えるといいね。あとは、仕事から入らない、暮らしから入るとというのが一番重要だと感じております。

暮らしは1年ぐらい住めば、仕事を見つけることが案外できるのです。どのような生き方ができるか、その上で仕事を生むこともできる。いかに暮らさせることができるか。そのハードルを低くするか。それが重要だと思います。

済みません。時間を過ぎました。ありがとうございます。

○樋口座長 どうもありがとうございました。急がせてしまって恐縮です。

それでは、続きまして俵万智委員からお願いします。

○俵委員 御紹介いただきました、歌人の俵万智です。子育てをきっかけに地方に移住した経験からお話ししたいと思います。

まさに関係人口から始まって、移住女子になったというような感じです。

まず、東京で子育てをされていて足りないなと思ったことは3つありました。自然に触れる機会、地域社会で子供を育てるという形、子供同士で野放図に遊ぶ時間。それが本当に足りなくて、野外活動とか習いごと、お金を出して何とかそういう時間を確保してやっていたのですけれども、やはり足りないなと感じておりました。

前回の自己紹介のときに申しましたように、ふとしたきっかけから石垣島というところに参りまして、そこにはもう、自分が足りないと思っていたものが湯水のようにあったといますか、労せず手に入るということで、結局5年間そこで過ごすことになりました。圧倒的な自然がありましたし、地域社会みんなで子供を育てるということが本当に魅力的で、しかも年齢の違う子供たちが毎日飽きることなく遊んでおりました。

スライドでその一端を御紹介します。これはみんなで刺し網漁という漁をしているところですね。大きく網を張って、潮が引いて逃げおくれた魚を取ることなのですが、こうやって漁師さんなども指導してくれて、魚のさばき方も覚えるといいますか、さばかない限り帰してもらえないという感じでおりました。

(PP)

これはお祭りですね。豊年祭です。いろいろなお祭りがあるのですが、パーランクーをたたきながら子供たちが行進して、旗頭などのデザインも子供たちに考えさせてこういうのをつくったりして、大人と子供、そして地域社会が一体になって祭りをしていました。

私も近づくと婦人部の一員として、週に2回ぐらいは踊りの練習に駆り立てられています。

(PP)

これは子供たちが牛の世話をしているところなのですが、ちょっとさぼって遊んでしまっていますね。

(PP)

これは滝壺です。海で遊んだ後に、ちょっと体をクールダウンするという意味合いと、真水で塩を落とすという、遊びの中にも非常に合理性があるなというのを感じました。

(PP)

これは近くにあった御神崎という夕日の名所なのですが、観光バスが連なるようなところではありますが、やはり住んでいる強みといいますか、一番いい時間に一番いい夕日を見ることができる。そのようなぜいたくな1枚です。虫みたいにいるのが子供たちです。

移住してから、子供がゲームをしたいというのを言わなくなりました。あんた最近ゲーム機さわらないねと言いましたら、お母さん、だって今、オレがマリオなんだよと言いました。まさに自然の中で冒険しているというか、自分がゲームの主人公のような毎日だったのだらうなと感じます。

私自身も短歌をつくる上で、非常に創作の幅というのが広がって、まさに『オレがマリオ』というタイトルの歌集もつくることができました。

子連れで移住するメリットというのは、地域との接点が否応なく生まれることではないかと思います。しかも地域にとっても歓迎されます。

子供自身もこうやって自然の中で育つことによって、将来もし学校とか何かのことで地方を離れたとしても、こういう経験を持った子は何か一つの選択肢として、こういう場所が自分にあると考えられると思うのです。ですから、将来的な長い目で見た上でも、子供がこういう体験をするというのは非常に大事なことです。

もしこういうことのハードルが高かったら、定期的に都会の子供たちが地方の人と交流する。自然ですとか地域社会の魅力というものを感じる。そういう体験をする仕組みもあったらいいなと感じます。

私自身も東京に住んでいた時間が一番長いのですが、反省を込めて言いますと、何となく東京ではないとだめというか、便利だし、楽しいし、やはり東京だねと何となく思っていたのですが、一回離れてみるとそうでもないなということも感じます。

考え方としては、東京にいて、地方のよさをたまに味わう。アウトドアですとか旅行す

るとかそういうことですね。そういう生き方と、地方にいてたまに東京のよさをつまみ食いする。上京して展覧会を見るとかお芝居を楽しむとか2通りあると思うのですけれども、東京のよさは意外とつまみ食いしやすいような気がいたします。

しかし、地方のよさというのは住んでみないとなかなか味わえない。そういう豊かさかなと感じます。

(PP)

私は今、宮崎県に住んでおまして、ちょっと資料で新聞記事を2つほどつけておきましたが、一つは漫画家の方で、数年前に宮崎に移住した方がいらっしゃいまして、この人などもやはり創作に必要なインプットを求めて宮崎に移住したということです。今はもういろいろな、機械なども発達しているので、東京でアシスタントを使わなくてもいろいろな便利な機械があるから大丈夫ということで、この方はもう今年から宮崎を舞台にした漫画の連載を始められています。

次の記事なのですが、これは宮崎県が独自の指標をつくって、その指標によると、前回は10位で、今回は2位であるという、なかなか我田引水な楽しい指標づくりをしていて、しかし、これはおもしろいなと思ったのです。

実は地方のよさを、地方の人が感じていない、気がつけていないという面がありまして、ですから、このように外にアピールするとともに、そこに住んでいる人にとって、宮崎なら宮崎はこういう指標で見たら全国で2位なのだよという、地方の人自身に気づきを促すという試みで、これなどは全国の都道府県で、なるべく自分の県が上位に来るような指標をつくってみるといのはいかがでしょうか。そうするとアピールにもなるし、住んでいる人の気づきにもなるのではないかと思います。

地方にいと教育が心配ということも言われますけれども、子供の育ちということを実に考えた場合、ゲームと習いごとと塾中心でいいのだろうか。それはすごく子供の学びや育ちということに関しては、むしろ私は心配を感じます。

生きる力ですとか考える力、それをつけるためには、やはり自然の中で子供同士が大人の管理下ではなく、学び合って、そこで社会性などを身につけていくと思うのです。ですから、そういうことを思ったら、地方は決して教育的に見ても劣っているとは言えないのではないかと。むしろ子供時代に体験しなければいけない時間を着実に過ごせる時間というのが、子供の育ちにとってすごく大事ではないかと感じております。

なので、東京でないとできないことはもちろんあると思いますが、東京でなくてもできることもあるし、東京ではないからこそできることもあるような気がいたします。

私は演劇が好きなのですが、東京ではないとできない最たるものは演劇ではないかと感じておりました。

資料が間に合わなかったのですが、最近の日本経済新聞によりますと、平田オリザさんという劇作家、演出家の方が劇団ごと兵庫県に引っ越しするというニュースも出ていました。やはり彼は創作の拠点としての地方、それから、最近子供が生まれたということで、

子育てを考えると移住するというインタビューも載っておりました。演劇が東京でなくてもいいのなら、何でもありなのではないかとさえ思われるような記事でありました。

少しまだ時間があるようなので、地域社会で子供を育てるということをつけ加えますと、例えば私のいた地域などでは、本当に子供同士がお互いの家に行き来するというのは当たり前。例えば、私はそこに移住したときに、出張は無理かなと思っておりましたが、うちは母子家庭なので、何を言っているんだ、あんたが稼がなくてどうする、出稼ぎ行ってこいということで、皆さんがかわりばんこに子供を預かってくれたりして、心配になって電話したりすると、ああ、さっきまでうちでごはん食べていたけど、気が変わって隣の家に寝に行ったよという感じの密度なのです。

そういうことで、むしろ子育てを地域でしたいという人もいるような気がいたしますし、そういったことで何となく東京にいるのではなく、自分の生き方、子育てで何を大事にしたいかということ、ちょっと立ちどまる時間ですとか気づきを促していけるような、何かそのようなきっかけがあったら、多くの人々の心も変わるのではないかと、自分の体験を通して思いました。

御清聴ありがとうございました。

○樋口座長 どうもありがとうございました。

それでは、これからは中原委員から御紹介いただきましたゲストの皆様からお話を伺いたいと思います。

恐縮ですが、3分ほどでお願いできますでしょうか。

○中村氏 頑張ります。

○樋口座長 最初は中村親也様からお願いいたします。

○中村氏 初めまして。KAKKO E合同会社代表の中村です。

弊社は岐阜にあるデザイン会社で、広告と教育を主な事業として、社員2名、設立2年の小さな会社です。

本日は特に力を入れている教育事業について御紹介できればと思います。

少し駆け足になりますが、詳細な情報は配付資料をごらんいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

ふだんは岐阜県根尾にあるシェアオフィスで、このようなところで働いております。

最初の事例なのですが、ものづくりの頭になるワークショップというのをやっています。このワークショップは例えば、いい道具を使って、いい椅子をつくっても、使ってくれる人が意味がないということで、誰がどのように使うのかを考えるワークショップになっています。

最近プログラミングワークショップが盛んになっているので、どのようなものをつくるのかということを中心に置いています。今、流れている内容は高山市でやったもので、センサーと木材を使ってコースをつくって、プログラミングした丸いロボットを動かすというものです。

これらは県内の小、中、高、大、専門学校、教育委員会さんのほうで開催した実績があります。

次はラジオワークショップです。これは科学技術の普及を目指したもので、基盤にはんだづけをするだけではなく、装飾作業とかを残すことでしきいを低くして、さまざまな視点からのものづくりを進めています。つくるだけではなくミニ放送局を設けて、ラジオの仕組みにも触れております。

教材関係も自社で開発しています。

次が要件定義のためのワークショップです。受発注の関係をなくして、達成したい課題を明確にしていくためのワークショップとなっています。

サービスのアイデアをロールプレイングしたり、2日間の合宿を含めて地元の銀行さんに向けて開催したものとなっています。

次が動画のワークショップです。これは専門的だった分野を誰でも簡単に体験できることを目指しています。

実施された作業は、こういうアニメーションなのですけれども、Keynoteというプレゼン資料作成のアプリがあるのですが、それで誰でも簡単につくることができるというものをやっています。

スマートデバイスが普及しているので、専用の機材とかを用意することなく、自分の端末にアプリを入れるだけで誰でも体験できるということがあるので、年齢や場所に制約なくできます。

あとは、RESASのアプリで受賞しました。特筆すべきことは、町会議員と治療院の院長、デザイナーという非エンジニアの中で達成できたというところがよかったのではないかと思います。

現状の課題として、こうしたワークショップが市民のものづくりへの理解や技術の底上げにつながって、地域内所得を上げていくきっかけになるのではないかと思います。

しかし、現状はかなり厳しくて、岐阜だけかもしれませんが、こうしたソフトウェア案件に関する理解が少ないので、ワークショップの金額が低く、運営が難しいです。へたすると20人ぐらいを無料でやってほしいみたいなことを平気で言われたりします。

弊社は2名でやっているなので、ワークショップの運営も8名程度が限界です。グループワークは別なのですが、この人数は限界地域においてちょうどいい人数ではあるので、その辺のバランスを見ながら、住む場所に影響されないワークショップの設計が今後できればと思います。

以上になります。

○樋口座長 どうもありがとうございます。

続きまして、やはりゲストスピーカーの山口歩那さん、お願いします。

○山口氏 KAKKO E合同会社の山口歩那です。今回は本巣市地域おこし協力隊としてお話ししたいと思います。

(PP)

私は今、2つの法人の理事を務めながら協力隊を行っております。本巢市の地域おこし協力隊は現在、4人で活動をしております。

私の地域おこし協力隊の志望理由としましては、私は協力隊になるためではなく、協力隊の制度を理由するために志望しております。そのような私の協力隊での活動を紹介していきたいと思います。

私の主な協力隊の活動としては3つあります。広告デザイン、ICT、STEM教育、キャリア教育と多様なキャリアの周知という3つで行っております。

(PP)

まず、広告デザインです。これは本巢市とか地元企業のこういった冊子だとか、あとはフライヤーをつくったりとか、地元企業のステッカーデザインをつくったりだとか、山バッジをつくったりだとか、看板をつくったりもしております。こういった看板です。

(PP)

次がICT、STEM教育とあって、地元の子供向けのワークショップです。何かをやっておりますが、こういう光る七夕の飾りをつくったりだとか、スピーカーのワークショップをやってスピーカーを手づくりでつくったり、ラベルのデザインをやったり、あとはラジオをつくって放送してみるものを行ったり、あとはパソコンとかを誰でも使えるような環境をつくったりしております。

(PP)

3つ目はキャリア教育と多様なキャリアの周知といたしまして、今、映画制作プロジェクトを進めております。

こちらは地方のPR向けの動画をつくるというのもあるのですが、大きな理由としましては、地方だけで映画のような大規模なメディアをつくれるということを知ってもらうことが目的で行っております。

このような感じに、地元の方にもエキストラとして出ていただいたりしております。

カメラマンとか監督さんたちもプロの方に協力していただいて、このような感じで本当に本格的な映画の撮影を行いました。

また、メインのキャストさんたちも、地元や岐阜に関連のある方に参加していただいております。プレスリリースなどはまだ手がつけられていない部分があるのですが、恐らく協力隊で本格的な映画撮影は私が初なのではないかと思っております。絶賛赤字制作中なので、周知していただけるととても幸いです。

こういう感じですね。私の協力隊の活動はいろいろやっているのですが、活動の軸といたしましては、都会でなくても、都会で行っているような仕事ができることを私自身が体現して、それを地域の方々に見てもらうことを目的に行っております。

そういった姿を地域の子供たちに見てもらうことで、1人でも多くの子供さんたちが地元に戻ってきて、仕事をつくって、地域で暮らしていけるような子供たちがふえたらいい

など思いながら活動しております。

活動の紹介は以上になります。お手元の資料には、いろいろ活動している上で感じた課題だとか、今後はこういう感じでやっていきたいみたいなことを書いておりますので、御参照いただくと幸いです。

以上になります。駆け足で申しわけありません。ありがとうございました。

○樋口座長 どうもありがとうございました。

続きまして西田拓馬さん、お願いします。

○西田氏 ただいま紹介にあずかりました西田拓馬と申します。

自分は岐阜県の大垣市で生まれて、大垣市で育って、大学で金沢に行って、卒業後岐阜に戻って設計事務所をやっています。それで独立して法人化した感じです。

今、この絵にあるように、ビルでTABという設計事務所と、GOCCOというIT関係やデザインをやっている会社と、南原食堂という社員食堂兼オープンな食堂みたいなものが入ったビルを運営しております。

特徴的なのが、このTab、GOCCO、南原食堂という会社の半数が、IAMAS岐阜県立情報科学芸術大学院大学出身者で構成されておまして、大垣市出身は自分だけとなっています。

(PP)

このビルで特徴的なのが、2階部分が食堂とオープンスペースになっておまして、本当にビルのみんなで運営しているのですが、勝手にそれぞれの欲望でもって、ライブをやったりトークイベントをやったり、あとはデジタルファブリケーション機器を置いた工房がありますので、そういうのを生かしたワークショップとかをしております。

(PP)

自分という人間がどうしてこうなったかというのを説明したほうがいいかと思って、このように書かせていただきました。

(PP)

まず、自分の個人としての興味がR不動産みたいなことだったりとか、10年ぐらい前に起こったビエンナーレとかトリエンナーレとかにすごく興味があったので、大垣市の中心部で事務所を構えて、これから行われるであろう建築物とかインフラの更新にかかわっていきたい、自分の住む町の風景をつくってイケたらいいなということで、町に事務所を構えようと考えていました。

そのときに、その大垣にあったIAMASという学校に着目しまして、その人たちが大垣というか、学校を卒業するとみんなどこかに行ってしまうので、その人たちが残りやすい場所をつくらうというところで、サロンみたいなものをつくったりとか、あとはR不動産っぽい不動産情報をストックしまして、その結果、今、シェアしているGOCCOという会社を誘致することに成功しまして、その後はもうDIYで、自分たちでオフィスを改装したりとか、仲間ができたのでセカンドオフィス。人がふえてオフィスが足りなくなったら自分たちで小屋を探してつくるであったりとか、それこそショップをつくったりとか、あとはスタッフ

の家をスタッフが勝手に改装して行って、シェアハウスつくったりとか、勝手にやってしまったりしているような状況をつくっていくと、そんなに地元の企業とかそういうことは、一緒にやったりはしなかったのですけれども、地元で無視できない存在になりまして、TABとGOCCOという会社が成長するとともに、近隣の本当に老舗の商店のショップデザインであったりとか、地元企業のプロダクトデザイン等をやらせてもらえるようになったので、当初想定していた風景をつくる仕事が現実的になったのかなと思います。

大垣では、できたらもうちょっと仕組みから絡めるようになりたいなというのは思っているのですが、ほかの自治体は、先ほどあった根尾の地区の岐阜というシェアオフィスみたいなところをやらせてもらったりとか。

(PP)

あとは駅前商店街主催のマルシェイベントの空間とかのデザインをさせていただいたとか、ちょっと離れているのですけれども、八百津町というところでも空き屋対策です。移住定住はリノベーションをして拠点をつくるという部分で、拠点の内装だけではなく、本当に仕組みづくりというのですかね。最初は自分たちが大垣でやったことをやればいいのかとっていたので、地元の小規模事業者であったりとか、それこそ地域おこし協力隊で起業し始めようとしている人たちの場所だったりコミュニティーをつくるような事業を今、受託してやっております。

以上です。

○樋口座長 ありがとうございます。

それでは、3人のゲストスピーカーを御紹介いただきました中原淳委員から最後、恐縮ですが10分ぐらいをお願いします。

○中原委員 中原です。ちょっと早目に。

「野良猫からみた山奥のまち・ひと・しごと」ということで、とりあえず現場目線で話をしたいなと思います。

(PP)

私はこのような感じの人で、もともとエンジニア出身のベンチャーのCTOとかをやっていた人だと思っていただけだと思います。

(PP)

これは移住前なのですけれども、今まで出したもので一番よかったのは、このアプリケーションなのですが、プレインストールで出すOEMモバイルアプリとビジネスというものなのですけれども、3キャリア12機種500万ライセンスを出荷して、累計売上高2億円を出すという、2010年ぐらいのころはまだドコモさんを中心とした、OEMでモバイルのアプリケーションを売るというのがあって、その最後の成功です。

そのあとは皆さん御存じのとおり、日本のその後スマートホンが売れなくなったので、うまくいかなくなったというものです。

ここから移住するのですけれども、事業の行き詰まり。余りいい話はなくて、事業に行

き詰まって、ちょうどそのときに子供が生まれてしまって、何か売り上げが少なくなっているのに家賃15万ぐらいして、保育料15万ぐらいするのです。

ベンチャーのCTOをやっていたので、すごく忙しくて、奥さんが子供の育児のワンオペレーションをやっている、しかもそのときは賃貸に住んでいたのも、下からうるさいと言われて2回引っ越したのです。一回引っ越すと40万か50万ぐらい飛ぶので、100万ぐらいなくなってしまう、しかし、そのときは給料というか役員報酬もかなりよかったですけれども、リアルな話、本当に離婚しそうになりまして、離婚するぐらいだったら、そのときは本当に大分しんどくて、本当に死んじゃおうかなと思っていたときもあったのですけれども、離婚するぐらいだったら一回奥さんの過ごしやすいところに行ってみよう。

(PP)

つまり、子供もいたのも、完全に子供と縁を切ったりするよりは、一回奥さんと過ごしやすいところに行ってみようと思って、こういうところに来ました。

これは先ほど山口さんとか中村君とかが言っていた、岐阜県の本巢市の山奥にある根尾というところ。人口が1,400人ぐらいしかいないところ。きれいなところ。

(PP)

根尾はどういうところかという、自然はいいのですけれども、大体産業構造はこういう感じのところ。

(PP)

土木建築と公共が75%ぐらいで、よくあるところだと思えるのですけれどもこういう感じ。引越して本当に大分幸せになりました。

なぜかという、先ほども言いましたが、奥さんのお母さんがこの近所に住んでいて、奥さんの実家の実家なのです。おばあちゃんのところが廃墟になっていて、築100年ぐらいの家がただで住める。家賃がただで、保育料が本巢市さんはすごくいいので、1万円以下で住めて、待機児童とかもないので、本当に何かストレスなく、奥さんの機嫌も本当によくなりました。

それのおかげでもう一人の子供も生まれまして、2人生まれるという特殊出生率にちゃんと貢献することができましたという感じです。

(PP)

ここからは田舎でよくある楽しいことは大体やっています、リノベーションを自分でやったり、自分の家は自分で直したりとか、森の幼稚園に行ったり、森で遊ぶということもできたりとか。

(PP)

あと、これは家から徒歩30秒なのです。家を出るともうこの川があるということで、すごくいい環境で、一緒に家族で味噌をつくったりとか。

(PP)

私も働く時間が半分以下になったので、まあまあ楽しく過ごしています。

(PP)

あとは薪ストーブをつくって、薪を入れて楽しく。こういうことは大体やっています。

(PP)

こういう地方の魅力みたいなことはよく出てくると思うのですけれども、ちょっとここで言いたいのは、本巢市の根尾地域というか、山奥はシングルマザーの人が実は結構多いのです。あとは、もうちょっと言うとわけありの人というか、実は何かがあるという人がいまして、思うのは、挫折して帰ってくる場所というか、セーフティネットというか、回復する場所になっているというのを一つ地方の山奥の魅力として見ていただけたらいいなと思います。私もそうで、すごく助かったということです。

(PP)

とはいえ、働かないといけないので一応働いています。働き始めるに当たって、先ほどのTABの西田さんとか、ソフトピアさんとか、先ほど出てきたIAMASという学校とかにすごくお世話になって、仕事ことができました。

やっていることはベンチャー時代と余り変わらなくて、受託開発が中心になっているのですけれども、こういうIoTデバイスを使っています。

(PP)

これは竹中工務店さんがやっている節電のアプリなのですけれども、デマンドレスポンスという節電の仕組みをつくるようなアプリをつくったりとか。

(PP)

あとはもう一個、これは取材が入るということで出せなくなったのですけれども、名古屋の医療機関さんと一緒にデジタルヘルスケアですね。介護の履歴情報のビッグデータを使って機械学習させるという、今、一番必要なもので、私たちが実験しているものでも、人件費とか20%ぐらい一気に消せたりするようなものをつくっています。

これも受託開発なので何ともいえないのですけれども、一応人口1,400人ぐらいの山奥でも開発はこういうことが一応できるということです。

(PP)

そうは言っても、1人でずっと働いていても結構寂しいので、先ほど出てきた中村君とか山口さんとか西田さんとかに付き合っていて、みんなで働けるような場所をつくりたいと思って、こういうGIDS（ギズ）という、東京ではよくあるシェアオフィスというかコワーキングスペースなのですけれども、何回も言いますけれども、人口は1,400人しかいないので、そういう中でわざわざこういう、みんなで集まるという場所をつくりました。

やりたいことというのは、先ほどの佐藤さんの生き方のパターンという言葉とか、何か多様性みたいなものを確保したくて、みんながちょっと山奥では見ないような人たちが働いている場所みたいなものをつくって、何かやったらおもしろいのではないかなというふう

(PP)

それのつくり方なのですけれども、まず、先ほど西田さんとかに来ていただいて、大垣から根尾は近いのですけれども、そういうところでみんなで一緒に手を動かしてつくったりとか。

(PP)

あとはその周辺のクリエイターを集めて起業塾をやるのです。教え合う場所というか、今、映っているのは陶芸家さんなのですけれども、実際に陶芸のビジネスを始めるところになりますみたいなことをみんなで共有してやるみたいな、ちょっとずつやったりとか。

(PP)

あとは勉強会をやったりとか、いろいろやっています。

(PP)

あとは不動産を私はやり始めまして、1年間で3件の空き屋をなくして、10名の人口を定着させました。すごくしょぼい話ですけれども、1,400人しかいないので、そういうのももうからないけれどもありかなと思ってやっています。

(PP)

ここまではある程度うまくいきましたという話なのですけれども、ここに引っ越させていただいたからには、うまく行っていないことも言いたくて。

この前の資料から出ているとおり、山奥ではやはり若者がほしくて仕事があるよという言い方をするのですけれども、東京圏の人から見ると仕事がないという結論になるねというのはあって、それは単純に、やはりミスマッチの問題だと思うのです。

(PP)

特にうちの近所の山奥だけの話かもしれないのですけれども、何となく、結局は権限委譲する気はなくて、肉体労働というか、兵隊としての若者は求めているという状態があって、そういうものなのかなと思って。

一方では、東京に来た人というのはそれなりに教育を受けているので、それを使えるということにしたいというのがあって、そこは何かうまく行っていないのではないかなという気はしています。

(PP)

これはただの仮説なので、この仮説を検証するツールというのを設計したいというか、そういうのが何かないと、実際、自分の地元では議論にならないのです。プロフェッショナル人材を還流しますといったときに、うちの地元で何と言われるかということ、「いや、新聞配達する人でもプロフェッショナルでしょ？」と言われるのです。それはそのとおりだと。

つまり、今までどおりの産業構造の人たちがプロフェッショナルだと言われるのです。

(PP)

ですから、そういうのがわかるように、何となく先ほど言っていた生き方のパターンと

というか、働き方のパターンみたいなのをわかるようにするとか。

(PP)

あとはその地域内でどういう仕事ができ、どういう仕事ができないかという、要は地域について企画を考えたりとか、政策のデザインをしたりということを自分たちでやるといのは余りないので、そういうのがある程度、どのぐらいできているのかというのを議論するベースになるツールみたいなのがほしいと思っています。

(PP)

再確認です。これを言うと、「そんなのできるに決まってるじゃん！」なのですがけれども、これで最初に見ていただいた、根尾地域というのはこういうものなんだよというのをわかってもらいたいのなのですが、土木建築業の人と、地方公務員の方と、その外郭団体の職員の方で、75%ぐらいなのです。これは小学校の保護者で見ただけなのですが。

こういう中で、例えばAIでイノベーションしましょうとか、IOTでとか、何とかかんとかと言ったって無理です。

(PP)

何か予算がついたら、結局その予算にどういう費目をつけたとしても、大体工事に落ちる。地方議員の人はほとんど土建屋の社長なので、それはそうなるだろうみたいな。ですから、ここは最終的には、若者がやりたい仕事というのは今、いる人たちの産業構造の中で考えたら、あるわけがないので、ですから、今、移住してきている人はみんな起業しているではないですか？私もそうですけれども、起業できる人しか来ないのです。だって募集がないのです。

私の会社がめちゃくちゃ大きくなって、お前が求人しろよと言うのだったら、そのとおりなのですがけれども、そこは間に合っていないくて、今はこういう感じですね、ということです。

(PP)

なので、国政に求めることというのは、現状うちの近所の山奥だけに関して言うと、先ほど何人がゲストプレゼンで出ましたけれども、割と最近っぽいことというか、東京とか名古屋に行くことができるような仕事をやっているのですけれども、それは全然山奥の中では求められていないというか、「そんなのは関係ないよね」で終わってしまう話です。しかし、実は林業にしろ、土木建築にしろ、いわゆるイノベーションが求められている。介護とか医療もそうだと思うのですが、そこは何かもう正直、国政とかが外圧になる以外は多分絶対何もできないなとか、つまり、予算がなくなったら考えると思うのですが、予算がなくなると怒られるではないですか。ですから、先ほど言った生き方のバリエーションとか、職業の多様性みたいなことをちゃんとバランスをとって、視点を変えられるような人の配置にしないと難しいなと思っています。

以上です。ありがとうございました。

○樋口座長 どうもありがとうございました。

それでは、これからまず質疑をしたいと思いますが、プレスの方はここまでにしたいと思います。

(プレス退室)

○樋口座長 それでは、まず事務局から、前回の宿題等々についてお話しただいて、その後、お互い質疑にしたいと思いますので、まず大津参事官からお願いします。

○大津参事官 資料9、10に基づき説明。

○樋口座長 ありがとうございます。

それでは、皆様との意見交換をしていきたいと思います。地方生活の魅力、UIJターンの拡大の観点を中心に、それぞれから御意見をいただきたいと思います。

最初に、きょうはプレゼンをしていただきましたので、そのプレゼンについて何か御質問、御意見がございましたらお願いしたいと思います。この点をもう少しというか。

出口委員、どうぞ。

○出口委員 皆さんのプレゼンをお聞きしていて、5月のレポートはもうでき上がったのではないかという感じを受けました。指出委員や中原委員を初め、若い皆さんの提案はそのまま最終提案になるような感じがしたのです。APUは東北地方では唯一気仙沼と協定を結んでおります。復興支援ということもあって、私も先週気仙沼に行って講演し、地元の人たちと話をしてきたのですが、それで、被災地方がたくさんある中で何で気仙沼を選んだのですかと。私は1月に就任したので経緯を知らなかったものですから。

そうすると、大学関係者の答えは、おもしろい人がいるからと。やはりおもしろい人がいたら、学生がインターンに行っても、いろいろな発想を受けるからと。

これはきょう皆さんが言われたことと同じで、地元の人がおもしろければ勝手に人は集まると思いますので、本当に皆さんの意見のとおりだと思いました。私も気仙沼は24時間の滞在でしたが、100人近い人と名刺交換をして、本当に皆さんがおもしろかった感じを受けました。

それから、地方を興そうと言えば、税制や補助金の話が必ず出のですが、これも別の機会に、たまたま気仙沼の後、盛岡の地場の中小企業の団体の方に招かれて、ここでも地域興しの話をしてきたのですけれども、そのときに話をしていたら、地場で製造業をやっている従業員が数百人いらっしゃる社長さんが一番困っていることが一つあるのですと。

事業承継の問題で、後継者ですと。自分もずっと悩んでいるのだけれども、やはり子供たちはもう都会に行ってしまうと、事業を承継しようとしません。そうすると、自分の代できれいに畳もうかということもいつも考えてしまう。どうすればいいのですかと。

しかし、岩手県の盛岡で数百人雇っていらっしゃる、もちろん関係者も多いでしょうから畳んだら大変なダメージですね。

事業承継という感じで、私は大したアイデアはないのですけれども、公募したらいかがですか。やはり経営者というのは大変なので、経営をやりたいという人でないとうまく

いけないと思うので、公募してちゃんと面談をして、2、3人入れて、1年とか2年とか一緒にやってみて選んだらどうですかと。そういうことを申し上げたのです。やはりお金を、補助金を出すから地方に来てくださいというのではなくて、やってみたいという人が行かなければ地域興しはできないと思うので、もし補助金のようなものを考えるのであれば、極論ですけれども、事業承継で候補者を全国から公募した企業には、例えば税金をまけるとか、そういうインセンティブを与えるようなアイデアがいいのかなと思いました。

本当に皆さんの話はそのとおりだと思うので、めちゃくちゃ勉強になりました。ありがとうございました。

○樋口座長 どうもありがとうございました。

事業承継についても、実はまち・ひと・しごとの創生会議のほうでも、今までもいろいろ議論してまいって、いろいろな仕組みは考えているのですが、またそれについては次回にでも少し詳しく、事務局のほうで説明してもらえますかね。

それと、おもしろい人ということで、実は私もお聞きしたかったのは、中原さん、あるいはそのゲストの方々が、どうしてその町を選んだのだろうか。あるいはどういうきっかけがあったのかと。それで、もともと大垣出身の方というのはわかりますが、ほかの方は東京から行かれた方、あるいは京都とかほかから行かれた方が多いと思うのですけれども、何か出会いがあったのでしょうか。

○中原委員 まず私から言いますと、私は単純に奥さんの実家の実家というのがありまして、そこからは実は私の大学院の後輩が中村君と山口さんになるのです。それは私が、その前に西田さんに、クリエイティブなことをやるのでぜひ、大垣から車で40分ぐらいなのですけれども来てくださいと言って、西田さんと「根尾をデザインするんだ」みたいな、よくわからないプレゼンをしたのです。「とにかくデザインなんだよ」みたいなことを言って、それを大学院の後輩に、「根尾はこれから格好いいデザインなんだよ」と言い続けたら、2人が何となく。

しかし、だまされたのかどうかわからないので、ちょっと聞いてください。

○中村氏 だまされました。

私の場合は、もともと品川にある広告の制作会社で働いていまして、ちょうどそのとき、スマートフォンのアプリがはやり始めて、もともとウェブの広告をつくっていたのですけれども、プログラミングがそろそろ覚えないとだめだなと思ったときに、たまたまIAMAS岐阜県立情報科学芸術大学院大学の卒業生の方がクライアントとして来て、話をしているうちに、どうも岐阜に行かなきゃだめだなと思って、その2カ月後に会社をやめて岐阜に受験しに行って、そのまま残っていたら、何か東京に戻るのもあほうらしいなと思って、そのままフリーランスを経て起業して、山口さんが暇そうだったので声をかけて、一緒に創業すると。

創業するときも金額も10万円とかそんなレベルから始めているので、そんなに使命感とかそういうものはなく、中原さんが根尾にいたので声をかけてもらってという御縁の中で

やったような感じですか。私は無計画です。

○樋口座長 いかがですか。

○山口氏 私もだまされました。

私は地域おこし協力隊の募集というのを中原さんのほうから、大学院の卒業生、在校生が全員入ったメーリングリストがあって、それで流してくださって、何かお金をもらいながら地域で好きなことができる制度があるぞということを知って応募してみて、受かって、後に地域おこし協力隊という制度を知ったくらいなので、本当に地域を選んだのも、中原さんが紹介してくただけなので、本当にこの根尾地域だから根尾地域に来たというわけではないですね。

なので、本当に卒業生に中原さんがいらっやって、大学院も40分圏内であるというので選んだという形になります。

○樋口座長 ありがとうございます。

中原さんがおもしろい人だということなのですか。わかりました。

ほかに何か御質問がございましたら、お願いします。

よろしいですか。

それでは、全体的な御意見をいただけたらと思います。

増田先生、どうですか。

○増田委員 ありがとうございます。今、それぞれの皆さん方のプレゼンを聞かせていただいて、具体的に体験したお話なので、これに勝るものはないと思いました。実は佐藤可奈子さんとは昨年、十日町のほうでお会いしていたのです。まさかここでこういう形で再会できるとは思いませんでした。佐藤さんがつくった干しいもを食べたりしていたのですが、かなやんファームからまた雪の日舎と、さらに輪を広げており、ネットワークの広がりというのは大したものだなと思っていたのです。

今、移住について、佐藤さんがおっしゃっていましたが、行政はとても力を入れていろいろ説明会をやるのですが、多分来た人は行政の話を知りたいのではなくて、先行して移住した人の話を皆さん聞きたいわけですね。

先ほどの資料でも、かなり地方移住を考えている人がいる。そういう人たちに対して、先行移住者との接点をどうやってつくっていくのかという可能性、あるいはやり方ですね。これをさらに考えるのがとても重要だというのが今、聞いていて思ったことの一つであります。

二つ目は、前回のいろいろなお話等を踏まえて、資料10で事務局のほうで主な論点案をまとめられて、意見と対比して整理してくださったので大変わかりやすいのですが、その中で私が見ておまして、ページ数で言うと3ページの3の(3)のところ、外国人留学生を就業しやすくするために、どのような取り組みが必要か。外国人留学生の数もどんどんふえているので、これはこれで非常に重要なところだと思うのですが、これからの我が国の国際化というか、既にかかなりの数が外国人として入って、国内で働いていらっや

るわけですので、必ずしも外国人留学生という範囲に限らず、もっと広く外国人一般、全体について、この関係を論点に据えて、どういう人材が活躍できるのか考えたらどうか。

今までの政策は、外国人はいわゆる高度人材についてはどんどん来てください、それ以外についてはおっかなびっくりではないですけども、かなり絞って考えていたのですが、これからは留学生だけではなくて、もっと広く、この分野について考えていったらどうか。

私は以前、岩手県知事をしていたときに、県内に中国だけではなくて、アジアの人たちですけれども、いろいろな理由で入ってきた人たちが多くいました。特にシンガポールの人などは、県でシンガポールへの農産物の輸出などを考えるときに、窓口としての機能を果たしてくれて、大使館だけではなくて本国とダイレクトの窓口を果たしてくれたということもありましたので、そういう役割を地域地域で果たすということも考えられますので、ここについてももう少し広く、論点に据えて議論したらどうかと思いました。

最後に池田さんのプレゼンの資料の中にも少し書いてありましたが、これもお金とか補助金とかそういう話では決してないのだと私は思うのですけれども、それにしても池田さんの資料を拝見していて、特に家族等の移転を伴う場合には、相応の支度金を給付することも考えてはどうかという指摘がありました。私も同様に思います。二地域居住や、どこどこに行き、いろいろ自分で起業したりするというのは、単身だとかなり身軽にいろいろなことをできるような気がするのですが、家族を伴う場合に、先ほどのプレゼンにもありましたが、奥さんに相談したらぴしゃっと断れたとか、離婚してからしてくださいと言われたという話をよく聞くのですが、それを超えて、家族帯同でそこに行きやいたいという場合には、やはりそれはそれなりの支度金を給付すべきではないか。これは安易に流れていけないのは重々思うのですけれども、少しそのあたりは財政的な支援ということもあっていいのではないかと、これももっと掘り下げて検討する必要があるのではないかと思います。

以上です。

○樋口座長 ありがとうございます。

ほかにどうでしょうか。外国人の話が出ました。出口さんのところも、いろいろなところと。

国レベルですか。それとも、地域レベルで協定を。

○出口委員 もし次回か次々回にお話しする機会があったら、APUの話をさせていただこうと思うのですが、私どもでは、90の世界の国や地域から約3,000人の学生が学んでいますが、やはり留学生に意味があると思うのは、例えば1年生、1回生は全員寮で日本人と一緒に過ごすのです。そうすると、お盆もわかるし、お墓参りもわかるし、ごみ出しもわかるのです。

そうすると、2年生から希望に応じて下宿をしても、別府の町に居を移しても、やはり社会との接点がスムーズにできるので、一般論で言えば、外国人にどんどん入ってきてもらうということはすばらしいと思うのですけれども、やはり社会の摩擦はかなり起こると

思います。

例えばイングランドでは、永住権を与える場合はかなり難しい試験をやっていますね。ロンドンでその試験を受けた日本人の女性に話を聞いたら、すごくいいと言っているのです。英語だけではなくて、いろいろなことを勉強しなければいけないし、しんどいけれども、その後、イングランドの生活になれやすくなる。ですから、そういう意味では、私はやはり外国人に来ていただくということは基本的に賛成ですけれども、やはり留学生から来てもらうということはすごく意味があると思いますね。頭も柔軟ですし、日本の文化、風土にもなれやすい。

もう一つは、APUでは日本語と英語で教育をやっていますから、英語だけで教育する大学はあるのですけれども、日本語をやるということは、外国人も必ず日本語を勉強しないと卒業できないのです。でも、言葉は文化ですから、言葉を学ぶということはやはり文化を学ぶことになるので、そういう意味でも地元になれやすいのかと考えます。

もちろん外国人一般で議論していいと思うのですけれども、私は留学生という問題設定は、やはりあっていいと思います。

○樋口座長 増田委員、どうぞ。

○増田委員 つけ加えていいですか。言い忘れたことが。

事業承継の話が先ほど少し出ていたのですが、全国でたしか企業は420万社のうち、これから120万社ぐらいだったですかね。後継者不足というか、なかなか見つけれないで、いずれ毎年毎年3万社とか、大廃業する時代が来るのではないかということが中小企業庁で言われているのです。

昨年の暮れの税制改正を見ていても、事業承継税制について大分使いやすく緩和されて、これはこれで当然必要なことだろうと思うのですが、例えば息子が東京から帰ってきて、幸いにして跡継ぎになったとしても、その周辺で、企業経営でいろいろサポートしてくれるような人材、親が幾らサポートしたとしても、大分年をとっていますし、若い経営者が会社を引き継いだとしても、なかなかサポートする人材もいない。ですから、そこを手厚くしていく必要があるので、これは人材支援機構ですとかいろいろな仕組みができ上がっていますけれども、特にこの事業承継で若い経営者にうまくバトンタッチしたとしても、その経営を継続して、きちんと支援していけるような仕組みが必要と思われます。

その一方で今、まだまだ定年がすんなりと延びていくことにはならないので、六十幾つかで定年になって、若い経営者をサポートするだけの實力だとか、まだ意欲がいろいろあるという人がいっぱいいらっしゃいます。

それから、地方のほうでも、金融機関でも大分人が余ってきているという事実があるので、そのあたりをどう事業承継に結びつけていくか、戦力として使っていくか。これもやはりよく考えていく必要がある。今度また議論されるということでしたが、この議論が必要ではないかと。

余りこの分野に深入りしていくと、地方生活実現会議と少し離れてくるかもしれません

が、ただ、地方での働く場を充実させていくという上では、この観点も非常に重要ではないかと思えます。

○樋口座長 ありがとうございます。

昨年、まち・ひと・しごとの会議のほうで少し示させていただきましたけれども、特に2030年にかけて、今の経営者の年齢構成を見ますと、どうも急ピッチでその問題が起こってきてそうだという。特に地域において、それが非常に深刻だということですので、これについては。

池田委員、どうぞ。

○池田委員 事業承継ということで、実際、東京を中心に年間3回公募しまして、大体300人から400人ぐらいの応募がありまして、10人か15人ぐらい採用しているのです。

ぜひ採用したいといううちの半分ぐらいは断られる。その理由というのは、レポートを出せと言えは出せますけれども、大まかに言えば先ほど述べたとおりなのです。

先ほどの事業承継。息子は継ぎたくなくてどこかに行ってしまうているから、家庭を持って生活しているから来ないのです。

ですから、私のところに今、結構優良なのが十数件あって、何が問題か、人がいない。

そうすると、内閣府のアンケートで、要するに、50%ぐらいが地方に帰ってもいいと。そのかわり、条件がそろえばというのが実態なのです。

そういうことを考えると、このマッチングは絶対、何とか支援センターとかそういうことでは解決できていないという理由があるわけですから、それを解決すれば戻ってくる可能性がある。

そのかわり、3年で徹底的に努力して、能力がある人だったら田舎でもリーダーだから1,000万稼げます。要するに、何が足りないかということ、地方にはリーダーが足りないのだと。自分で創造して事業をイノベーションする。いわゆる継承する企業というのは必ずイノベーションしなければ絶対もたないのです。ですから、息子も諦めて帰ってこないということです。

それから、旧態依然の企業なので、SNSも含めたあらゆるマーケティング手法とか、海外も含めてやるためには経験がないということですので難しい。それだったら帰りたいという人がそれだけいるので、帰してあげるといえることが必要ではないか。帰るための仕組みづくりを国を挙げてやらないと、もうおそいと。

きょうはわくわくということで、もう一つ。

お話を聞いていた中で、地方、田舎でいい意味でわくわくして、一つのストリーム、いわゆる大きな流れとして、地方の本当に山間地に入って楽しくやるという。もしくは、生きがい求めてやる。これ自体は大きなウエーブにならないのではないかと。それはそれですごく大事なことだし、いろいろな施策でサポートしてやればいい。だけれども、地域がこれだけ大量に若者が出て、既に地域がなくなっていくのに、さらに企業がなくなるといえるのは、ロットで100人単位で潰れていくということです。若者のやりがいをつくるには

イノベーションが必要だと。イノベーションをやるというのはリーダーが必要だと。要するに、地方にリーダーが不足しているときに、ここにおられるすばらしい関連の方々、まずこういう会議をやりながら、皆さんは帰る気はないということです。

銀行も御存じのとおりで、大銀行が今、2万人リストラせざるを得ない。そういう人たちを呼ぶというのは、まさしく銀行と地方の給与格差はすごいものがあるので、周辺環境を整えれば帰ってくれるのではないかというのは、よほどお母さんが倒れてどうしても帰らなければいけない、非常にマイナーな気持ちで帰らざるを得ない。それぐらいの話なのです。

ですから、前向きに自分でイノベーションして帰れるぐらいの、30~40代ぐらいのを帰すぐらいの仕組み、もしくは20代でも帰せるような仕組みが必要ではないかと思っています。

○樋口座長 ありがとうございます。

今、出ました事業承継あるいは新規開業、ニュービジネス協議会も関連してくるようなお話というのは、次回か、この後少し時間をとってまた改めて。

それから、外国人、留学生の話。これについてもまた改めてと思います。

ほかに私も、俵さんのお話で、地域で子供を育てる重要性とかいうことの気づきを促すことが必要ではないかと。どうやれば促せるだろうかというところはどうでしょうかね。

○俵委員 私が石垣にいたころ、小学館の『edu』という教育雑誌の方が取材に見えて、すごく新鮮で、子供を育てるといのはこういうとだなということを皆さんおっしゃって帰っていかれましたけれども、先ほど来出ていますように、奥さんが反対されるというのは、多分大きな理由の一つは、子供の教育ということだと思ふのです。

ですから、子供への教育観ということ、ちょっと立ちどまって考えるところに来ているのではないかと私はすごく感じています。

机の上のお勉強も大事ですが、それは大人になってからもできることですけれども、本当に子供は子供時代にちゃんと子供として生きないと、大人の予備軍というか、小さい大人として育てられているような気がして仕方がないのです。

ですから、やはり一番子育てにかかわるであろう母親の教育観というか、そこに少し変化がないと厳しいかなと思うのですけれども、今はもういい大学を出て、いい会社に入ったから一生安泰という時代ではもうなくなってきているわけですから、そういうことも含めて、困難に打ち勝つ力を子供につけさせてやりたいと考えたときに、地方の教育力というのはなかなか侮れないものがあると思います。

ただ、私自身は本当に実感して、そういうことを言ったり書いたりしておりますが、それをどのようにモーメントとしてというのは、なかなかこういう万能な方法があるというのは今、思いつきかねるのですけれども、それはすごく大事なことでないでしょうか。

それは本当に文科省の言っている、生きる力、考える力というものは、机の上の勉強だけではないということは一つ確実に言えるような気がいたします。

○樋口座長 大崎委員、どうぞ。

○大崎委員 きょう、プレゼンの皆さんのお話を聞かせていただきまして、わくわくドキドキしながら聞きました。

もちろん、返す刀で、池田委員の事業承継のことも喫緊の問題ではあると思うのですが、本当に銀行マンのAIができて、銀行マン、経理、財務の人たちの仕事が半分ぐらいなくなるかもしれないみたいな時代に、やはりおやじ、お父さん、男の論理よりも、俵万智さんのというか、女性の論理のほうが今、もう一度基本に戻るといふか、いま一度そこに立ち返らなければいけない。それが、地域が元気になって日本を元気にする源ではないかと個人的には思いました。

きょうは私のところの会社の資料を、白い紙で2枚お配りさせていただきました。お笑いというのは別に産業にもなりませんし、多くの雇用を創出するわけでもないのですが、私たちは社内では、こういうことをずらずらとたくさん書いてあるのですが、笑顔のインフラみたいな言い方をしております。明るいとこに人は集まりますし、笑顔とかそういうもののインフラをこの6年ぐらいかかかって、全国に広げてまいりました。

沖縄では映画祭というお祭りを10年やりまして、47都道府県、住みますエリアというのも6～7年前から、そして4年ほど前からアジアでも住みます芸人というのをしております。

そこで地元の方たちと触れ合って、いろいろ信頼関係を築いてきました。何とかこういう、曲がりなりにも地べたをはったインフラを6～10年かかってつくってききましたので、きょうプレゼンをしていただいた皆様方とも、このインフラを利用して、世間に周知させるといふか、こんなに楽しくて今、人生とか暮らしを原点で考える時期ではないか。それのいいお手本がこんなにたくさん、全国地域にあるのだというのを、移住するしないは別として、都会に住む人たちも含めて、若者も、私たちみたいなじじいも考える時期ではないか。そういうことを考える、すごくおもしろいといふか楽しい実例があるといふことは、私はきょうはすごくよかったなと思います。

詳しい数字は知らないのですが、ことしの成人式は、新宿区は40%が外国の方で、私が、へえ、そんなにすごいといふと、いや、大崎さん、池袋は60%が外人の方ですよみたいなことで、そういう時代になったのだなといふのも、いま一度生活といふか、そういうのを考える時期だと思えます。

もちろん、本当にソーシャルゲームの勢いも、これからも強く強くなると思っておりますけれども、僕がマリオだなどという子供は、ゲームをしながらでも育ててほしいと思えますし、そういうところも、本当にきょうのプレゼンですごく思いました。

この資料は当社の社員の人たちにも来てもらっているのですが、47都道府県の住みますエリアの責任者とか、年末にムハマド・ユヌスさんというグラミン銀行をつくられた方と打ち合わせ会議をしまして、年明けに会社をつくりました。

そういうところもうまく皆様に御理解いただいて、一緒に連携できればなと思います。

あとはAPUと卒業生のリエンドラ君という子にも吉本興業に入ってもらって、もともとはスリランカでテレビの地上波のニュースキャスターをしていて、いきなりAPUに行って、吉本に来てくれたという。

当社みたいな会社でも多様化してきましたので、皆様のお役に立てるように、この当社がつくったインフラを眺めていただいて、御利用いただければと思いますので、また発表の機会もいただきますので、よろしく願いいたします。

○樋口座長 ありがとうございます。

ユヌスさんがノーベル平和賞をとった後、私も対談したことがありまして、涙からとまらなくて対談にならなかったという経験を持っています。

○大崎委員 3月28日にもまた来日していただけるので、そのときには当社のお笑い芸人と住みます芸人が見つけた課題を、スタートアップの会社を今、100社ぐらいやっているのですけれども、彼らと二者の力で、社会の地域の課題解決の方法をユヌスさんにプレゼンするというイベントもしようと思っていますので、詳しく決まりましたら皆様にお伝えして、御興味を持っていただければと思います。

○樋口座長 ありがとうございます。

まだまだ話はあるかと思いますが、きょうはだいぶ御指摘いただいた中で、トピックスを今後議論しなければいけない議題というの、幾つかわかるようになってきたのではないかと思います。

何かこの場で特段言っておきたいということがございましたらお願いします。

池田委員、どうぞ。

○池田委員 どうも、奥様方が田舎に行きたくないというのは誤解されているようなのですが、データでお願いしたいと思うのですけれども、奥様方は子供の教育に関しては十分、俵さんの本か何かで洗脳されていて、やはり子供を育てるなら都会の、要するに、こういうビルの中ではなくて、田舎で育てたい。そういうイベントがあると結構、皆さん参加されている。だけれども、圧倒的に、そうは言っても経済的なリスクのほうが根本的に怖い。それは俵さんみたいに自立して収入がある人は多分そういうことを言えると思うのですけれども、もし旦那があれになって、何か起こったら、自分は子供たちの責任を持ってないみたいなどころがあるという深層心理を彼女たちは持っているのではないかという感じがしますので、できれば、子育てをどうしたいかという。都会で育てて、一貫教育の小中に入れたい。そういう人もいると思うのですけれども、そうでない層の人が圧倒的に多いと思いますので、その辺が議論のベースとして、地方に帰っても、それが何がハードルになっているかということを確認にしたいので、ぜひデータがあればそろえていただければと思います。

○樋口座長 以前は教育というと、やはり学力をメインに考えてきて、子供の学力がどう育つかという。

最近、そういう認知能力とあわせて、むしろ頑張りとか、そういったいろいろなリーダー

ーシップであるとかいう非認知能力の育成というのが、教育にとって非常に重要だという話が出てきました。

そのバランスは大分変わってきたなとこのところ思っているのですが、そういったものも含めて、地域の問題と絡めて考えていくことができたと思います。

俵委員、どうぞ。

○俵委員 お母さんたちの意識がそこまで変わっているというのは、非常に心強いお知らせをいただいたなと思って、そうであればこそ本当にどうやってその気持ちを実現できるかというサポートが必要になるなと感じました。

○樋口座長 岡委員、どうぞ。

○岡委員 私も先ほど貴重なプレゼンを皆様からいただいて、非常に勉強になりました。ありがとうございます。

私も一番関心を持っているのは、やはり地方での子育てというところです。地方では、自然が多く素晴らしい環境が、今の子供たちの成長には必要なものだと感じています。今まで、学歴が大事にされ様々な政策が集中していたと思いますが、やはり現代に必要なのは違うものだと思います。ヨーロッパでも悩んでいる若者がいますが、日本でも将来に対する不安や悩みを抱えている若者が結構多くいると感じています。

やはり必要なのは学歴よりも精神力が強い子というか、まさにAIが進むと、判断力と精神力、リーダーシップが必要というところです。地方で自然と触れ合いながら、そういう強い精神が作りやすいと私もそう思っています。

そこにあわせて今、日本は教育制度でまた判断力が必要とか、考える力が必要というのは言っているのですけれども、またそれを授業にしていくという、非常に矛盾していると感じています。教育施設での時間は朝から晩まで、まだ同じ建物の中で囲まれていて、結局何も変わっていない。学校関連でまた何か部活動をして、野球部とか何かして帰ってきたらもう夜で、一日が終わる。そういった時間の割合についての問題もすごくあるかなと思います。あるドキュメンタリーで、フィンランドの教育についてでしたが、フィンランドでは、宿題がほとんどない、学校が昼で終わりみんな帰ったり、また授業中もみんなを外に出て体を動かしたりとか。フィンランドはそういった教育はすばらしいと思いますし、とても優秀な人材を出しているという成果もあります。やはり何かそこにヒントがあるのではないかと。

それは地方とどう関係あるのかというと、地方で自然の環境と共にそのような新しい教育に対する環境を作れば、実験的に地方ですぐれている教育を提供すれば、興味を持つ人もいると思います。自分の子をそのような環境で育ててみたいという、イコール家族全体が地方に引っ越していく流れができるというアイデアなのです。

ありがとうございます。

○樋口座長 ありがとうございます。

沖ノ島のああいう例もございますので、そういったものも含めてまた議論していければ

と思います。

それでは、次回以降議論を進めていきたいと思います。事務局から説明をお願いできますか。

○大津参事官 資料11に基づき説明。

○樋口座長 ありがとうございます。

それでは、最後に梶山大臣、田中副大臣、長坂政務官から、会議を踏まえて一言お願いいたします。

○梶山大臣 本日は貴重なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございます。

それぞれの立場、それぞれの地域、それぞれの分野で貴重なお話を聞かせていただいたと思っております。

人生で誰もが遭遇する事象に対しての価値観をどうするかということです。地域の産業に入っていく場合にはどうしたらいいのかということ。あとは全国共通の産業や仕事の中で、今度は収入格差をどうしたらいいのか。いろいろな課題があろうかと思えますけれども、この地方創生が始まって今は3年目。一旦5年の計画を立てていますが、息の長い取り組みになります。5年間の総合戦略の中間年ということで、大体基本レシピ、基本メニューは出てきていると思うのです。その中で深掘りをしていく必要があるという思いを持っていて、あらゆる視点で、あらゆる手法で、そしてどんなに地方がすばらしいのかということをしてPRしていく情報を発信していくということが非常に大事なことです。

あと数回お話を聞かせていただきながら、頭の中がまとまっていけば、また、収れんしていけばいいのかと思っております。次回も自由なお話を聞かせていただければと思っております。

ありがとうございます。

○樋口座長 田中副大臣、いかがでしょうか。

○田中副大臣 ありがとうございます。

皆様からのプレゼンを聞かせていただいて、本当にわくわく地方生活をしてみたいという気になりました。

一番関係人口をふやしていく。この受け入れる力が重要だと。確かにそのとおりだなと思います。

あと、俵委員からも、地方の人も、地方のよさがわかっていない部分もちろんあるのではないかと。いかに交流するか。都市は都市での生活というか、そういうよさがあって、それを両方ともやはり交わるというか、そういう部分が必要ではないか。

これは生き方とか暮らし方、このパターンというか、そこがやはり一番重要であって、人生再起の場、あるいは事業承継、いろいろな意味でマッチングするポテンシャルというのはすごくあると思うのです。

つまり、それをいかにマッチングしていくか。マッチング力が一番重要になってくるのではないかと。今、改めて感じたところであります。これからまたどんどん御意

見をいただいて、いろいろな政策としてまとめることができればと思っています。

答えはきっと1つではないと思いますので、またよろしくお願いします。

○樋口座長 ありがとうございます。

それでは、最後に長坂政務官、お願いします。

○長坂政務官 本当にきょうもいろいろな、わくわくするお話をありがとうございました。今、いろいろな委員会でも、私なども答弁に行くのですが、けさも非常に地方創生の成果が出るのかとか、非常にいろいろな意味で注目されておりますし、厳しい御意見も野党からいただいた次第ですけれども、本当にこういった地方の魅力を発信して、もっともっと日本の地方というのはすばらしいものがいっぱいあるわけですから、そういった中で日本人の感覚も変わっていくということも大事なことではないかと思いますが、本当に皆様方のすばらしい御意見で、これからまたさらに厚みのある議論を深めていただきたいと思います。

ありがとうございました。

○樋口座長 ありがとうございました。

本日予定されている議事は全て終了いたしました。少し時間がオーバーしてしまいましたが、これにて終了したいと思います。

最後に事務局からお願いします。

○大津参事官 ありがとうございました。

以上をもちまして、第2回「わくわく地方生活実現会議」を終了させていただきます。

次回の会議は先ほど申しましたとおり、3月22日の14時を予定しております。詳細は後日また連絡いたしますので、御参集のほどよろしく願いいたします。

ありがとうございました。

○樋口座長 ありがとうございました。